

Ⅱ 研 究 経 過

本校は、昭和53年4月に開校^設し、本年度⁶、年目を迎える精神薄弱養護学校である。本校は、開校^設以来「表現化に視点をあてた教育課程の編成と実践」について、研究を進め、その程度、研究紀要や、公開発表会をもって、本校の考之方なり研究の方向を示して来^て、ここで、一応その経過をふり返つてみる。

1. 昭和53年度の研 究

研究紀要第一集から抜粋すると、次のようになっている。

研究の方向上、「積極的に社会に参加しうる人間の育成」

—小・中・高等部一貫した教育内容の精選と構造化についての
共通理解—

と定め、その教育内容選定の視点と、自主化、社会化、表現化、取業化におく事とし、各分野の目標、分野間のかかわりと、中心的分野と表現化として行うことと決め、教育内容表と作成。さらに、社会的自主の考之方、高等部のあり方、表現化の目標等の問題につき研究を進め、最終的なテーマと次のように決定した。

—「表現化に視点をあてた教育課程の編成」—
・小・中・高等部一貫した教育内容の精選と構造化の検討
・教育内容表の完成
・年間指導計画の作成

2. 昭和54年度の研 究

53年度に作成した教育内容表及び年間指導計画の実践過程の中から、サブタイトルを次のように変えた。

—社会的自主を目的とする小・中・高指導の研究—

とし、「社会的自主」を目的とするための各学部を中心分野と各学部の教育目標を次のように決定した。

小学部—自主化と中心にして、表現化とのかかわり、ねらいは、

「身土自主や健康安全に対する能力の育成」

中部部—社会化と中心にして、表現化とのかかわり、ねらいは、

「社会生活に必要な行動様式を身につける」

高等部—取業化と中心にして、表現化とのかかわり、ねらいは、

「取手人としての知識技能や取手への適応」
として、その育成のための実践研究を進めた。

3. 昭和55年度の研究

54年度の実践の深化と、序習指導法の改善、さらに評価についての研究を進め、各序習の特色を一層明確にしようとした。

4. 昭和56年度の研究

過去3ヶ年間の総まとめの年として、指導内容の検討に重点をおき、特に年度、重複化に対する内容の検討を行い教育内容表の改訂をし、「生きたはたらく」カとなるための内容をどうもりこんで行くかに研究の視点とあてた。従って、その指導方法も、個人生活の基礎づくりから集団生活への適応、さらに社会的取手的な生活への発展としての序習内容の一貫性の問題が、研究の中心となった。

このように、経過を振り返ってみると、そのねらいとしているものは「社会的自立」であり、その能力の育成のために、「表現化」に中心をおき、その内容をどう一時間の指導内容にもりあげることが最大の課題であった。しかし、「表現化」の内容は、~~毎年~~年に言語的・表情的なものをとびまわす、「意志伝達」をするためのめしゆる「表現」を指していることは、紀要第3号の中で、前大石校長が述べているところである。(しかし前大石校長の紀要第3号には、指導の発展として、次のようにも述べている。即ち、「要するに、精神薄弱児にとって意志伝達のための表現力にも欠ける面があるので、このような力を特別な教育方法や、指導内容をもって教育していく必要がある……」と、過去4年間にわたっての研究活動の及ぶべき問題点としてあげている。

昭和57年度の取組みについて

先にも述べている如く、本校の序習の流れは、個人生活の基礎づくり、集団生活への適応、社会的取手的な生活への発展とその段階をふんで、子どもの能力を深化発展させようとしている。ところで、最初の「個人生活の基礎づくり」であるが、これは、序習を進めるにあたって、一人一人の子どもの本質が、それをねぞ

まへん

の子どもなりに、不細かく能力が発揮されるであろうことの一つの大きな前提となっていることはいうまでもない。

その子なりに、その子がおもっている能力を最大限に発揮することで、本校が従来まで研究を進めて来た「表現化」の序習目的を達成できることになる。さて、子どもが能力を最大限に発揮できるといふことは、前提として、その子どもが、その子なりに各種の能力を備え持っていることとなる。凸凹のひずみがなく、一にもつていふことが大切なこととなるわけである。そしてこのような子どもに序習指導を進めることか、度ば、従来から研究をしていふ「表現化」の内容を一部消化充實発展させることとなる。例えは、「ものをよく見ない子」「手の動きが定まらない子」「感覚の鈍い子」それらと併せもつ子、など色々考えられるが、これら一人一人の子どもの、その欠陥を少しでも取り除く序習の発展点に立たせることは、序習の成果をあげるためにも必要なのであるといえよう。又、このようなそれぞれの子どもの欠陥を知って、それを序習計画の中にどのように位置づけ組みこむか、その方法、あり方によつては、子どもの「表現活動」も十分たもし、不十分たもするものといえる。そこで、本校では、このような序習の大前提である。子どもの欠陥をどうめるための研究を進めようとしているわけであり、そのことによつて、子ども一人一人の夢のな心ともち、あらゆる行動にたくましくたも向かって行くであろうことと想定し、本年度からの研究テーマを次のように定めたいのである。

—「豊かになんともち、たくましく行動する子」—

そこで、一つの子どもの見方として、A.A. シトラウスとL.F. レーチネンは、その著「脳障害児の精神病理と教育」の中で次のように述べている。「脳障害児の場合、抑判欠如とか多動性とか被動性は利便に対する過剰反応のあらわれとみるべきである。とくに幼少の脳障害児の場合、それは大脳皮質の有効な調整の限界を超えた行動とみるべきである。このような子どもは、外界の物音に注意を向けるだけで済まずに、それを見るために意に

か行よりた^いという衝動を抑える^いこともできないのである。また
近くに居^つている子どもと、~~ま~~を通り過ぎていく子どもが
つの利^源となつて、つい叩^いたり、殴^うたり、押^したりして、
これに及^ぶるのである。……」と、~~また~~これらの子どもに対する
治療教育のあり方も述べてある。つまり、子ども一人一人に、そ
の原因を究明し、治療するための教育内容を組織化し、学習内容
に位置づけることの必要性を述べているわけである。

た^いどもが、本年度から進めて行^くようとしている研究も内容的に
は上述のよう^な視点に立^つて進めようとしているわけである。

いいかえれば、本校に在^る子ども一人一人についての、そ
れぞれの能力を分析し、それと学習の内容に位置づけ、学習計画
に段階的に位置づけ、学習と展開して行くこと、実は本年度の
研究テーマに迫^ることにある^かと思うのである。さらにそのこと
は、過去私たちが4年間、研究を進めて来た「表現化」をより一
層深化し、元^来しい「表現活動」をすす^める子どもの育成へとつな^が
り、本校の最終的なねらいとしている「社会的、取^柄的自主」を
う^たげることになるのではないかと思う。